



陸軍少將石井善七叙勲ノ件
 右謹テ裁可ヲ仰ク
 昭和十一年一月二十八日
 内閣總理大臣岡田啓介



内閣



賞勳局 三三號 陸軍 一

昭和十一年一月二十八日 内閣書記官長

内閣總理大臣

賞勳局總裁



陸軍少將正五位勲三等石井善七
明治三十九年六月陸軍砲兵少尉
ニ出身以來陸軍造兵廠東京工
廠精器製造所長、同技術課長陸
軍科學研究所員、陸軍省兵器
局銃砲課長、陸軍科學研究所第
一部長等ノ要職ニ歷任シ終始克々其

賞勳局

ノ職責ヲ竭セリ殊ニ陸軍科學研究
所々員時代ヨリ將來戰ノ勝敗ハ所謂
科學的奇襲兵器ニ負フモノ大ナルヲ達
觀シ各種獨創の新兵器、創案ニ着
手シ現時研究中ナル電磁、光學の各
種奇襲兵器中其ノ基礎ヲ同人、研
究ニ發スルモノ甚シトセズ就中不可視
光線利用兵器、光電話利用兵器無
線利用兵器及攻撃等ハ其ノ
著明ナルモノナリ昭和九年八月第一部

昭和十一年一月二十八日
昭和十一年一月二十八日

長ニ就任スルヤ國軍要望、必勝兵器
ノ研究促進並其戰用化ニ銳意努
力シ着々實效ヲ収メ無線遠隔操縱
兵器、高壓電氣兵器、攻撃不號ニ
號等ハ其ノ著シキ例ナリ又大正八年
八月以來数次佛國ニ駐在シ歐洲各
國ニ於ケル新兵器研究ニ關スル重要
資料ヲ蒐集報告シ皇軍々事技術
ノ進步發達ニ貢獻セル所甚カラス功
績顯著ノ者ニ候處本月二十六日死去
内閣
セル趣ニ付此際特ニ同日附ヲ以テ勲
二等ニ叙シ瑞寶章ヲ授ケラレ度
此段允裁ヲ仰ク

裏面白紙

陸軍少將正五位勳三等石井善七
右者別紙功績書、通其功績、是顯著
ナル者、有之候處、一月二十六日依病死去候
ニ付、特別御思召ヲ以テ死亡同日附勳二
等ニ叙シ、瑞寶章ヲ授ケラレ度
謹テ奏ス

昭和十一年一月二十七日

陸軍大臣 川島義之



陸軍

功績書

陸軍少將正五位勲三等石井善七

右者明治四十三年三月陸軍砲工學校高等科ヲ卒業引續キ東京帝國大學ニ進学ヒ大正三年七月拔群ノ成績ヲ以テ理學部實驗物理學科ノ課程ヲ卒業シ爾後陸軍造兵廠東京工廠精器製造所長、陸軍造兵廠東京工廠技術課長、陸軍科學研究所長、陸軍省兵器局銃砲課長、陸軍科學研究所第一部長等ノ要職ニ歷任シ此間數次ニ旦リ外國ニ駐在シ軍事技術ノ調査研究、製造及兵器行政等ニ貢獻セシ所大ナルモノアリ其卓越セル學識、偉大ナル人格ト相俟テ國軍ニ盡セシ功績極メテ顯著ニシテ軍部内ニ於テハ勿論部外學術界ニ於テモ亦信望極メテ篤ク特ニ光學關係ニ於テハ學界ノ權威者タリ茲ニ同官ノ業績中特筆スヘキニ三ヲ記述スレハ左

陸軍

一、如シ

一、科學的奇襲兵器ノ創案

陸軍科學研究所員時代ヨリ夙ニ將來戰ノ勝敗ハ敵ノ意表ニ出ツル獨創的兵器所謂科學的奇襲兵器ニ力ヲモト大ナルヲ達觀シ各種獨創的新兵器ノ創案ニ着手セリ現時當所ニ於テ研究中ナル電磁、光學的各種奇襲兵器中其基礎ヲ石井少將ニ發スルモノ甚シトセス就中不可視光線利用兵器、光電話利用兵器、無線利用兵器及攻擊手小銃等ハ其著明ナルモノナリ

昭和九年八月第一部長ニ就任スルヤ國軍要望ノ必勝兵器ノ研究促進茲其戰用化ニ銳意努カシ着々實效ヲ収メ其功績顯著ナルモノアリ就中無線遠隔操縱兵器、高壓電氣兵器、攻擊手小銃、手小銃等ハ其著シキ例ナリ特ニ昨年三月以來宿痾再

發スルニ至リシモ病軀ヲ驅テ登廳シ克ク非常研究ノ指導ヲ當
リ遂ニ其職ニ殉スルニ至リシハ崇高ナル犧牲的精神ノ發露ト
謂フヲ得ヘシ

二、技術謀報勤務ノ功績

大正八年八月ヨリ同十二年十月迄、昭和四年八月ヨリ同五年三月迄、
昭和六年八月ヨリ同八年三月迄ノ三回約七年間ニ亘リ佛國ニ駐
在シ歐洲各國ニ於ケル新兵器研究ニ關スル重要資料ヲ蒐
集報告シ皇軍々事技術ノ進歩發展ニ貢獻セル所甚大
ナリ

三、帝國代表委員及陸軍側委員トシテノ功績

(イ) 昭和四年九月ヨリ同年十月迄「和蘭國海牙」ニ於テ開催セ
ラレタル第一回國際無線電氣通信技術諮問委員會ニ
帝國陸軍側委員トシテ列席シ其審議及決議ニ參加シ

陸軍

大ニ盡瘁シ其功績大ナルモノアリ

(ロ) 昭和七年九月ヨリ同年十二月迄西班牙馬德里ニ於テ開催セ
ラレタル萬國電信會議及國際無線電氣通信會議ニ帝國
委員トシテ參列シ萬國電氣通信條約及同條約附屬
規則ニ調印ヲ了シ且萬國信號所ニ關スル決議ニ參加
シ大ニ盡瘁シ其功績大ナルモノアリ

四、其他委員トシテノ功績

陸軍々需審議會委員、學術研究會議電波研究委員、
日本學術振興會常置委員トシテ多年會議ニ參列シ大ニ
盡瘁シ其功績顯著ナリ

以上ノ如ク石井少將ハ其該博ナル學識、熱誠眞執ナル研究
心、卓越セル兵器行政手腕並燃ユルカ如キ奉公犧牲心ヲ以テ
多年皇國軍事技術ノ進歩發達ニ貢獻シ以テ國軍ノ威力ヲ

増大ニ出テテハ帝國代表トシテ其重大使命ヲ全ウセシハ其功績極メテ顯著ナルモノト認ム

陸軍

履歴書

陸軍少將正五位勲三等一石井善七

明治十八年十一月一日生

熊本縣平民

現所屬地

陸軍科學研究所

任陸軍砲兵少尉同日砲兵第六聯隊許被仰付

叙正八位

補砲兵第三十四聯隊許

任陸軍砲兵少尉

陸軍砲工少校卒業同日官等科卒業トシテ尚下年卒業

ヲ命ス

陸軍砲工少校卒業等科卒業

陸軍砲工少校卒業等科卒業成績優等ニ付

陸軍

軍刀一振下賜

大正三年七月十日 勲正七位

勳負下令

砲兵第三十四聯隊小隊長被仰付

及嶺港出發

龍口港上陸

畑之原十八師團管理部隊被仰付

青島守備軍司令部許被仰付

復員下令

乘新砲兵工廠件被仰付

青島港出發

宇品港帰着

- 大正三年七月十日
- 同 年七月三十日
- 同 年八月十六日
- 同 年八月三十日
- 同 年九月六日
- 同 年十月五日
- 同 年十月三十日
- 同 年十一月一日
- 同 四年二月十三日
- 同 年四月二日
- 同 年四月五日

同	年十月七日	大正三四年戦役ノ功ニ依リ軍功旭日章及金五万圓ヲ授ケ賜フ
同	年十一月七日	大正三四年戦役後陸軍記念章授典
同	年十一月十日	大正三四年戦役後陸軍記念章授典
同	年四月十日	任陸軍砲兵大尉
同	年五月二日	補 東京砲兵工廠員
同	年七月二十九日	陸軍砲兵砲射撃学校御用掛ヲ命ス
同	年八月三十日	陸軍無線電信調査委員ヲ命ス
同	年八月五日	陸軍技術本部御用掛ヲ命ス
同	年九月十日	佛子ノ出張ヲ命ス
同	年九月十七日	叙従六位
同	年九月十七日	横濱港出發
同	自大正七年八月二日 至同八年十二月三十日	東京砲兵工廠ニ在リテ戦役ニ関スル勤務ニ従事ス
同	大正九年十月一日	大正四年乃至九年戦役ノ功ニ依リ勲五等瑞寶章及金七万五千圓ヲ授ケ賜フ
同	年十一月一日	大正四年乃至九年戦役後陸軍記念章授典
同	年十一月一日	戦捷記念章授典
同	年七月三十日	任陸軍砲兵少佐
同	年四月一日	補陸軍造兵廠東京工廠員(編制改正)
同	年八月六日	補陸軍造兵廠東京工廠精密製造所長
同	年十月二十日	横濱港帰着
同	年十二月十四日	補陸軍造兵廠東京工廠技術課長兼陸軍造兵廠東京工廠精密製造所長
同	年五月三十日	免兼職
同	年九月二十九日	陸軍科学研究所御用掛ヲ命ス
同	年十一月五日	電波研究委員ヲ薦託ス(學術研究會議)

同	十一年十一月一日	叙正六位
同	十四年二月十二日	兼補陸軍造兵廠之員
同	十八年八月七日	陸軍科學研究所御用掛ヲ免ス
同	十八年八月七日	補陸軍科學研究所之員兼陸軍造兵廠東 京二廠之員
同	十五年三月二日	任陸軍砲兵中佐
同	昭和二年十月二十九日	叙勲四等授瑞寶章下
同	三年八月十日	陸軍技術本部御用掛ヲ免ス
同	五年十月十日	大正紀念章授與
同	四年八月一日	任陸軍砲兵大佐
同	八年八月五日	國際無線電氣通信技術諮問委員會參列ノ後 歐洲へ出張ヲ命ス
同	八年八月八日	通信省事務ヲ囑託ス
陸軍		
同	昭和四年八月十日	横濱港出發
同	五年九月二日	叙從五位
同	五年三月三十日	下關港帰着
同	五年五月三十日	通信省事務囑託ヲ辭ス
同	六年十月二十五日	兼補陸軍砲兵學校研究部之員
同	六年八月一日	補陸軍技術本部御用掛駐在官
同	九年九月一日	下關港出發
同	九年九月十七日	巴里到着
同	七年六月二十五日	ロドリットニ於ケル萬國通信會議及無線電 信會議參列ノ帝御委員トシテ參列被仰付
同	八年三月十八日	補陸軍省兵器局銃砲課正ハ
同	八年四月一日	巴里出發
同	八年四月一日	要塞建設實行委員ヲ命ス

めくれず

同	年四月十日	為蒙委員会臨時委員ヲ命ス
同	年四月十三日	陸軍軍需審議会委員被仰付(内閣)
同	年四月二十日	兼補陸軍通信學校研究部委員
同	年四月二十三日	明司塔帛看
同	年四月二十三日	陸軍省兵務局ニ在リテ為洲事表勤務ニ従事ス
同	年五月四日	陸海軍軍需工業勤員規定委員ヲ命ス
同	年五月三十日	北塔試験委員會委員ヲ命ス
同	年八月二十九日	佛蘭西國政府ヨリ贈典シタルコトヲ中シエードルドル ナシヨナル、ドラ、レジヨン、ドノール也章ヲ受領シ及佩用 ヲ允許セラル
同	年九月七日	陸軍馬政審議会幹事ヲ命ス
同	年十月三十日	兼補陸軍自動車學校研究部委員
同	年九月一日	塔洲五皇帝陛下ヨリ贈典シタル建玉功勞章ヲ 受領シ及佩用ヲ允許セラル 陸軍
同	年三月九日	塔洲五へ出張ヲ命ス
同	年三月十五日	國產自動車型式決定委員ヲ命ス
同	年三月十五日	下関塔出祭
同	年三月十五日	釜山塔上陸
同	年四月十日	大連塔出祭
同	年四月十三日	神戸塔帛看
同	年四月二十日	昭和六年乃至九年事表ニ於テ功ニ依リ此三年 旭日中授章及金々六万圓ヲ授ケ賜フ
同	年四月二十九日	昭和六年乃至九年事表陸軍記章授典 任陸軍少將
同	年八月一日	補陸軍科學研究所長一部正
同	年八月一日	北塔試験委員会委員、國產自動車型式決定

一四

委員、陸軍馬政審議会幹事、陸海軍軍需工業動員施設委員会委員、要塞建設執行委員ヲ免ス

一四十年八月二十四日

バルー團政府ヲ聘與シタル「コンマンソレイユ」社章ヲ受領シ及佩用ヲ允許スラル

一四十年一月二十六日

死 亡

陸 軍

裏面白紙

内閣 陸軍 一

勲第一九六號

叙勲ノ件進達

昭和十一年一月三日 陸軍大臣 川島義之



内閣總理大臣 岡田啓介殿

一 陸軍少將 石井善七 叙勲ノ件

右進達ス

331



陸軍